

レーでは、この地域の登山許可の状況を調査することにしていたので、今夜の高所順応を兼ねて、IMF のレー事務所を訪ねた。所長のソナム・ワンギャル(Sonam Wangyal)とは、氏が 1965 年インド隊のエベレストに最若年隊員(22 歳)として登頂したとき以来の付き合いである。私は同年、29 歳でタウラギリ II 峰に遠征した。お元気そうで、早速、周辺の地図を広げて歓談するが、氏の顔色は暗い。その訳は、最近、IMF のレー事務所が発行できる登山許可は、ストック・カンリ山群に限られることになってきたからだという。以前は、ストック・カンリに続く、マッシュヨー山群、その南のカン・ユーセイ(Kang Yusei)山群、さらには、

沖と Sonam Wangyal 氏(右)

ルプシュ(Rupshu)地方の山々まで許可がだせていた。しかし、遭難救助の態勢が整っていないことやリエゾン・オフィサーの手配が充分でないことなどから、最近では、ストック・カンリ(Stock Kangri)山群に限られてしまったという。推察すると、登山料が IMF 本部に入らなかったからという話もある。そのため、IMF のレー事務所を訪れる登山者は激減し、さらに困ったことには、無許可で登山する者もあとを絶たないという。遭難対策の面からも IMF を通し、正式登山許可で登山したいものである。筆者がレー入ってしばらくして、ストック・カンリの第 1 キャンプで高山病のために女性隊員が死亡した日本隊があった。インドのエージェントが主催したいわゆる商業登山隊である

次に、多くの登山隊の世話をしているレーで一番強力なエージェントの RIMO EXPEDITION 社を訪問した。本社は市内にあるが、最近、カルドン・ラ(5650m)に行く途中にある登山用具の倉庫だった 5 階建ての大きなビルに本拠を移している。レー到着 3 日目に高所順応を兼ねてカルドン・ラに日帰りした帰りに訪問した。連絡しておいたこともあり、社長の Chewan Mutop が応対してくれ、2 時間ほど、東部カラコルムの登山事情について歓談した。氏とは 1980 年代に HAJ がインドとの合同で東部カラコルムの未踏峰に初登頂した頃からの交流である。ひとしきり回顧談を楽しんだあと、本題にはいり下記の情報を得た。

Chewan Mutop 氏(2020 年 4 月から HC 会長になっている)

東部カラコルムの登山はインドとの合同登山に限るとされていたか、最近では外国隊単独で登山許可が取得できるようになっている。ただし、サセル・カンリ山群の南側とショーク川南のディシュキット(Dishkit)の南側でラダック山脈のカルドン・ラ(Khardung La,5578m)からトングラスゴ・ラ(Thanglasgo, or Lashimou La, 5151m)とニア・ラ(Nia La, 4070m)に続くラダック山脈の北側テルテップ(Telthep,6002m)や山群とその周辺である。イギリス隊が数年前から毎年のように入山し、未踏峰はほぼなくなっている。サセル・カンリ山群の南側にはドンゴド谷(Dongdo Valley)から南の比較的広い山域で多くの 6000m 峰がある。2018 年 8 月に無名峰(6240m)にイギリス・ドイツのペアが初登頂し、Black Pyramid Peak と命名した。また、エストニア隊がこの山群最高峰の無名峰(6720m)に初登頂し、Rangston Gyathok と命名した。

Rangston Gyathok(6720m)(左)

Black Pyramid Peak (6240m)(右) (Photos: Goffin Keith)

公刊された地図で参考になるのは、Olizane Ladakh(North)のみで『インド・ヒマラヤ・日本山岳会・2015 年』の 46 頁の概念図(E.KARAKORAM SASER)と 52 頁の概念図(E.KARAKORAM CHANG CHENMO)の間で空白



になっている。なお、『インド・ヒマラヤ』の改訂増補版にドングド谷登山略史と上記空白部の概念図を載せる準備をしている。

帰路にニュー・デリーの IMF 新任の Director, Col(Retd) P.C.Chaudhary を表敬訪問し、ラダック地方の登山許可の様子をうかがった。なお、標高と地名は、主として Leomann Paps による。

(本校は HIMALAYA, No.488, 2019 Spring, pp.6-9 を元に補筆・修正した)